昭和二十年、雨情の月

谷津矢車

誰もいない仏間で、ヒロは箱の蓋を開いた。
中には、白磁の花瓶が収まっていた。表面に僅かばかり埃が積もり、せっかくの柄がくすんでいた。箱から取り上げ、乾いた雑巾で軽く拭いた花瓶を仏壇の前に残したヒロは縁側へ向かい、並べ置いていた梅の枝を取り上げた。控えめに蕾を開く花からは凛とした香りがした。僅かに香る梅花を手に薄暗い仏間に戻ったヒロは、柄杓で水を壺に注いだのち、枝を差し、仏壇横の床の間に捧げ置いた。
そんな頃、奥の廊下からヒロを呼ぶ声がした。
「母さん、戻りました」
ヒロが梅の花から目を離すと、丁度その声の主が仏間に入ってきたところだった。
カーキ色の服に帽子の国民服は、わずかにだぶついていた。国家総動員体制の前は、仕立てものの背広を着、髪を油で後ろになでつける洒落者だったが、すっかり時勢の色に染まってどこにでもいる愛国の壮年となっていた。ヒロの長男、雅夫であった。
「随分と早かったのねえ」
「できるだけ早く帰った方がいいと思いまして。東京でも大きな空襲があったとか。足止めされたらと気が気じゃありませんでした」
「慎重なのはいいことよ」
ヒロは開け放っていた障子から庭を眺めた。四角く切り取られた庭の向こうには、穏やかな春の海、見渡すばかりの水平線が広がっている。この海の遙か向こうには鬼畜米英の一角を占めるアメリカがあるというが、ヒロにとって太平洋は世の果てそのものだった。数千海里の彼方に人の生活があることをなおも実感として呑み込めずにいる。
「ご苦労様、雅夫。そうだ。早く、逢わせておくれ」
雅夫は、ああ、と声を上げ、下げていた鞄から小さな箱を取り出した。
「こちらです」
その箱は、方半尺ほどの白木の箱だった。配給制のこのご時世、白木の箱とは豪勢ではあるが、いかにも小さい。こじんまりとした箱を見下ろし、ヒロはぽつりと言った。
「これが、あの人なのね」
「分骨するとなれば、これくらいになってしまうものでしょう」
無感動な雅夫の口ぶりに、少しヒロは苛立った。
この人は、いくつもの顔を持っていて、お骨を必要とする人もまた沢山いる。弁(わきま)えてはいる。ヒロは心の中に広がる僅かな波紋に見て見ぬ振りを決め込み、雅夫に問うた。

「鶴田の家はどんな塩梅だった？」
「向こうの人たちも元気にやっているようでした。つるさんが言うには、今でも線香を上げにやってくる人が絶えぬようで、こんなご時世なのにありがたいこととしみじみ言っておられました」
雅夫は仏壇の前に設(しつら)えられた白木の壇に骨壺を置いた。燭台の蠟燭から火を取り、線香に火をつけて香炉に立てると、辺りに甘い香りが広がった。雅夫が仏壇の前を立った後、ヒロもそれに続いた。線香に火を灯し、香炉に立て、手を合わせた。いつの間にか、手には深い皺が刻まれていた。ここに嫁に来た時分は、もっと手は柔らかく、すべすべとしていた。この人がもし今ここにやって来たとしても、わたしが誰なのかわからないだろう。そう思うと、不思議と笑みが零(こぼ)れた。竜宮城から戻った浦島太郎もかくのごとき思いに浸っていたかもしれない、そう思ったのだった。夫が死んだ。哀しみはなかった。ただ、心の中に確かにあったなにかがごっそりと抜け落ち、空っぽになったような心地だけがあった。
ヒロは手を叩いた。
「さて、そろそろ用意しなくちゃね。ヒラメを捌かせているところなのよ」
「ヒラメですか。豪勢ですね」
「弔いの時くらいしか羽目を外せないから、奮発したのよ」
嫌なご時世になったものだ、そんなことを思いながら、ヒロは立ち上がり、台所で一人、ヒラメ相手に奮闘しているであろう嫁のもとへ急いだ。

○

昭和二十年一月、国民的詩人、野口雨情が死んだ。
「シャボン玉」、「証城寺の狸囃子」、「七つの子」、「赤い靴」などといった童謡の作詞で特に知られ、日本三大童謡詩人とまで謳われた。その死は、太平洋戦争の最中でありながら、多くの人に悼まれた。
そんな野口雨情には、家族があった。
二人目の妻であるつるとその間に儲けた子供たちがそれである。
そして、もう一つ、雨情には家族があった。
最初の妻であるヒロと、その子供たちである。

○

予定通り、午後一番から法事が始まった。

近くの寺の住持を呼び、経を読んでもらった。戸主の雅夫、その妻の横に座るヒロは、読経が終わるまでずっと首を垂れていた。異国の言葉じみた経文が頭上を通り抜け、消えていく。忍び寄る春の風に時折心を奪われそうになりながらも、ヒロは一人、深く心を沈めていた。

その後、精進落としが持たれた。仏間と下段の間の襖を開いて一間にし、久々に蔵から出した膳をそれぞれの座布団の前に置く。雅夫の妻が腕によりをかけたヒラメのお造りは白く光り、ヒロの孫たちも目を輝かせていた。

宴会が始まった。孫たちの中にはきかん坊盛りの子供もあったが、年上の者の言うことを大人しく聞き、刺身を口に運んでいる。厳かな場であることは子供も承知しているらしい。大人たちも「時勢柄」とお決まりの言葉を口にしてあまり酒を飲もうとしなかった。

ヒロは住持の横に座り、酒の相手をしていた。ヒロと同年代だからかれこれ七十近い住持は、ヒロの酌のままに酒を飲み、誰よりも顔を真っ赤にしていた。

「まだ、呑まれますか」

「もちろん。般若湯は修行の一環ですからな」

かっかっか、とかくしゃくと笑う住持は、ふいにしみじみと言った。

「それにしても、ヒロさん、あんたは偉いよ」

「藪から棒になんですか」

「英吉さんは足を向けて寝られないよ。もう足も何もあったもんじゃないけど、あんたがあの世に行った折に、散々文句をつけてやるといい」

住持が英吉――野口雨情のことを悪し様に言うのには、理由があった。

雨情の実家は、磯原の名家、野口家である。元を正せば水戸藩の郷士であり、水戸藩主の磯原逗留所とした屋敷、観海亭の管理を任された由緒ある家柄であった。御一新の後には廻船業に転じそれなりに財をなしたが、雨情の父の代に起こった不幸な事故をきっかけに事業が傾いた。結果として雨情は放り捨てるように家を出、最初の妻であるヒロが野口家の家政を担う格好になったのである。

住持は磯原の人間である。それゆえに、雨情の若い頃を知っているのだろう。

「あの人はとんだ道楽者だよ。日本三大童謡歌人だかなんだか知らないが――。少しは磯原のことも顧みればよかったんだ」

どう答えたものか悩んでいたところ、助け船が入った。雅夫だった。雅夫は手に銚子を何度か揺らした。

「住持様、今日はまことにありがとうございました」

「おお、雅夫君か。いや、ご苦労だったなあ」

雅夫は銚子を掲げた。

「ささ、呑んでください」
ちらりと雅夫から目配せされた。頷き返したヒロは席を立ち、誰にも聞こえぬような大きさで息をつき、縁側へと足を向けた。
庇(ひさし)に切り取られた空は、驚くほどに青かった。今は明るい時代ではない。日々配給が減り、小作人たちが毎日のように請願にやってくる。町には貧乏の香りが蔓延(はびこ)り、町を行けばカーキ色の憲兵たちが大きな顔をして闊歩している。町からは色という色が消え、灯火管制のせいで夕方ともなると死んだように真っ暗になる。そんな灰色の時代でも、自然は相も変わらずその本性を誇っている。もしも夫がここに居たなら、今の世をどのように言葉で切り取るのだろう。そんな疑問に駆られた。だが、ふと、夫の言葉がヒロの耳に蘇った。
『あなたも、詩を書けばいいのです』
いつ言われた言葉だったろうか。
思い出すことはできなかったが、その時の雨情の口ぶりはしっかりと思い出せた。万事につけ大人びた物言いをする人だったけれど、その言葉だけ、やけに子供じみて聞こえたのだった。
ヒロは、この青を言の葉で切り取ってみようと試みた。だが、どう思いあぐねても、言葉が出てこなかった。雨情と暮らし始めた時分、夫の勧めで詩作や物語の執筆に乗り出した頃には、すらすらと言葉が湧き、形をなした。しかし、昭和二十年三月のヒロにはもう、言葉で以てなにかを編み上げることができなかった。それこそ、息を吸って吐く、そんな一連の動作の中で、何の気負いもなくできていたことだったのに。
大事にしていた手紙を焼かれてしまったような感覚に、ヒロは襲われた。悲しくはない。喪失に慣れることが、ヒロにとっての人生だった。ただ、空白だけがある。痛くもない。痒くもない。ただ、そこにあったはずのものが既にない。そんなふわりとした違和感が、ヒロの胸中にあるばかりだった。
どこか晴れがましい弔いの席は、日が暮れるまで続いた。

その日の夜、ヒロは壇から夫の骨壺を連れ出し、家を出た。
春とはいえ、夜風は冷たい。時折流れる風が近くの林の木々をさわさわと揺らしている。それでも風の切れ間に波の音が聞こえるほど、辺りは静かだった。屋敷を出てすぐ、横に立つ観海亭が夜道に飛び出すヒロを見咎めた。こんな夜に何処に行こうというのだい？　そう言いたげにヒロを見下ろしている。ヒロは、心中で答えた。これまでずっとあなたのために尽くしてきたのだから、今日くらい好きにさせてください、と。

不満げに佇む観海亭を残してヒロが向かったのは、屋敷の南にある岬だった。
岬には天妃山という小山があり、こんもりとした森になっている。頂上に神社が鎮座していて、石鳥居がその麓に建っている。荒々しい、さながら怒りめいた風に身を晒しながら、ヒロは空を見上げた。満天の星々が瞬いている。いくら手を伸ばしても届きそうにないほど、天幕は広かった。
ヒロは石鳥居の傍らにある大岩に腰を下ろし、抱え持ってきた骨壺を脇に置いた。皺だらけでささくれ立った手を眺めながら、ヒロは一つ頷き、骨壺に語りかけた。
「覚えてらっしゃいますか。あの日のことを」
骨壺は口を開かずここにある。話し出すわけはない。そうと分かりつつ、ヒロはなおも続ける。
「思えば、あなた様は、よくよく本心をお見せにならない人でしたね」
ふとヒロは、嫁いできた時分のことを思い起こした。三十年以上前。口にすればそれだけの時間に過ぎなかったが、ヒロからすれば、一瞬にも、途轍もない長さにも思えた。

○

ヒロが磯原の野口家に嫁いだのは、明治三十八年春のことだった。
実家の髙塩家は喜連川家中の勘定奉行を勤めていた名家で、明治の頃からは役儀で得た算術を元手に醤油を商う大商人に転身、喜連川の地はおろか辺りでも随一の身代を誇る商家となっていた。武家の商法とさんざんこき下ろされ、多くの武家が慣れぬ商売で身代を持ち崩す中、才覚でのし上がった高塩家には、格式よりも実力、そんな気風があった。だからこそ、当時の女人としては珍しく、ヒロは高等女学校で大いに学ぶことができた。国語が特に得意で、できることならば教師になりたい、そうヒロは願うようになっていたが、そうは行かなかった。ある日、ヒロの父が、結婚を命じたのであった。
「女の幸せは結婚ぞ」
いかめしく述べた父の顔がいつまでも忘れられない。娘を高等教育に出すほど先進的にも拘わらず、封建的な押しつけをした父は、まるで殿様のようにでんと構えて座っていた。当時は面食らったものだったが、今なら分かる。物わかりのいい文明人めいた父の態度は、所詮は服のようなものだった。1枚衣を脱ぎ捨てれば、ちょんまげと大小の刀がすぐ姿を現す。とはいえ、そんな父に対峙するヒロもまた似たようなものだだった。あまり抗弁することもなく慣れ親しんだ喜連川の地を離れ、磯原へと嫁いだ。

二日余りの花嫁行列を経て踏んだ磯原の地は、喜連川とはまるで国ぶりが違った。喜連川は田園地帯の三方を山に囲まれた、広くて狭い天地をしていた。だが、磯原の地は、海岸沿いにわずかにある平地に家々が並び、島一つ見えぬ海が広がっていた。ずっと山と平野に抱かれて育ったヒロからすれば、磯原の地は世のどん詰まりにも見えた。

天気雨の花嫁行列というなんとも幸先の悪い新婦ヒロを迎えた新郎が英吉、のちの野口雨情だった。華燭の典の折、ちらりとその顔を見据えた。緊張しているのか始終俯(うつむ)いて、紋付を重そうに纏っている。はっきりとした目鼻立ちで存外に整った顔立ちをしていたものの、どこか所在なげにも思えた。話を聞けば、元は東京にいて新聞の記者をやっていたらしい。どうやら、ヒロとの結婚も、結局は家督相続の一環であったらしい。

そんな始まりの夫婦だったから、最初の頃は心を通わすことができなかった。なんとなく、英吉はヒロによそよそしく、ヒロもまた、英吉に心を開くことができぬまま生の織物のような新婚の日々を過ごしていた。有り体に言えば、ままごとめいた日々を送っていたのだった。

そんな日々の中、ヒロはあることに気づいた。

夫が十五夜の晩、どこかに外出することだった。

いい気はしなかった。

浮気でもしているのではないか。そう思い至ったら、居ても立ってもいられなかった。いや、別に心を通じ合わせていない夫の不貞など知ったことではないと突っぱねようとも考えたが、それでも心のざわつきを抑え込むことができなかった。

かくして、ある夏の日の十五夜、英吉の後を追うことにした。

屋敷を出た英吉は、ぽっかりと浮いたお月様の明かりを頼りに下駄を鳴らし、海の方へと向かってゆく。そうしての麓にある石鳥居に至ると、脇の大岩に腰を下ろし、真っ暗な空を手持ち無沙汰に見上げていた。

しばらくヒロは様子をうかがうことにした。だが、いつまで経っても人は来なかった。そればかりか、懐から短冊を取り出し、矢立の筆でなにかを書きつけていた。しかし、途中で筆が止まり、筆の尻で額の辺りを何度もこすっている。あれは―。あの行ないに、ヒロも見覚えがあった。高等女学校での国語の授業、作文実作の折、横に座っていた同級生の見せる仕草によく似ていた。

ヒロが物陰から離れ、前に立つと、英吉は顔を上げた。まるで、悪戯の見つかった子供のような顔をして。

「ヒロさん、なぜここに」

後を追いかけていた旨を話した。すると英吉はくしゃっと顔をしかめた。それが苦笑いの表情であることに気づくのに、ヒロは少し遅れた。

「詩を書いていたんです」

英吉のあらましについては誰彼ともなく耳にしていた。東京にいた時分には坪内逍遥に師事し、社会主義に根ざした詩を様々な同人誌に投稿していた詩人としても活躍していたらしい。仲間内では将来を嘱望されるほどの腕前だったというが、結局、家督相続のためにここ磯原に戻ってきた。

「磯原には、同人誌もありませぬのに」

発表する場所もなければ、研鑽する相手もいない。そんなヒロの指摘を正しく受け取り、英吉は続けた。

「なくたっていいんです。詩は、僕にとっては人生そのものだから。日々生じる様々な思いを形にして遺す。それは自分のためでもあるし、詩の神様への供物でもある。即物的な意味なんかない。僕の詩は未だ下手の域を出ていない。でも僕は、一生詩を書いていくと思う」

ヒロは確かに見た。

英吉の目の奥で熾る、青い炎の揺らぎを。

この人は磯原に収まる人ではないのかもしれない。廻船業の跡取り息子、観海亭の守人という器すら破ってしまう人なのかもしれない。

「なぜ、詩がお好きなのですか」

「そうだな——」しばし顎に手をやった後、英吉は答えた。「力があるから、かな。たとえ書き手の名前が忘れられても、優れた詩は残る。野口英吉の名が忘れられても、詩だけは残り、僕と縁もゆかりもない人の心を動かす。こんな凄いことはない」

らんらんと輝く英吉の瞳から視線を外したヒロは、目を泳がせた。ヒロの眼前には、全天を睥睨する満月、そして黄金の道がぽっかりと浮かぶ大洋の姿があった。

そうだ。名案を思いついたといった調子で英吉は言った。

「あなたも、詩を書けばいいのです」

「わたしが、詩ですか」

「きっと、上手くなると思います」

英吉は、そう言って、笑った。まるで、悪い遊びを教える子供のように、屈託がなかった。

○

ヒロは、昭和二十年の現に引き戻された。どれほど長い間いたのだろうか、ヒロにも判然としなかった。若かりし頃、英吉が座っていた岩の上には、野口雨情の骨壺がぽつんと置かれていた。

あの頃からヒロは英吉の才能に気づいていた。

だというのに、皮肉にも、ヒロとの暮らしの中で英吉の才は開花しなかった。

新婚の頃、英吉は新聞「いはらき」に詩を寄稿し、歌人として活動していた。だが、商人としての暮らしが、歌人としての英吉を磨り潰した。父の代から嵩んだ借財、手を出しては失敗する新事業……。一時は英吉が樺太や北海道に渡り、事業に手を出したり新聞社に勤めたこともあった。だがそれでも野口家の家運は上向かず、ヒロの実家髙塩家から援助を得、髙塩家の土地管理を手伝うことで糊口を凌いだ時期もあった。それでも英吉は野口家を立て直せず、ついには子供に債権が及ぶまで逼迫した。野口家を存続させる―。そのために、財産分与の目的で書類上の離婚をすることにした。だが、その後、ヒロが一時喜連川に帰ったり、ヒロの兄がヒロの子供を喜連川へ連れ帰ろうとしたり、山の財産を巡る行き違いがあったりと問題が次々に勃発し、数年間は人を挟んですら碌(ろく)に話すことの出来ぬ間柄となった。

そんな二人の雪解けは、それから数年後のことだった。

喜連川の髙塩屋敷にやってきた英吉が、元妻であるヒロに頭を下げてきた。

「野口の家に戻って、子供を育ててはくれないだろうか」

この頃、既に英吉は水戸で詩作を始めて人気が出、中央詩壇にも復帰、詩人として成功を収めつつあった。彼の着ている服も、仕立てのいい背広とズボンに改まっていた。

話を聞けば、乳母に子供を育てさせていたものの、母恋しさにずっと泣くばかりでほとほと困っているらしい。英吉はこれに当たり、男の戸主なみの権限(ちから)をヒロに与えた上で野口家を任せるとした証文を持参した。大胆な話だったが、もう、野口家には舅も姑もおらず、反対する者はなかった。

図々しい申し出だとは思った。だが、自分が腹を痛めて産んだ子供のことでもあった。反対する理由はない。

かくしてヒロは喜連川を離れ、磯原に舞い戻った。野口家の事実上の戸主となったヒロは、磯原の観海亭と野口家を世間の荒波から守り、英吉との間に生まれた子供たちを育てた。長男の雅夫はひとかどの男子として立ち、昭和二年には正式に家督を譲った。

やがて、かつての夫とのしこりもなくなっていた。時折届く英吉の手紙に返事をする余裕も生まれた。離婚したはずの夫婦の在り方としては奇異に映るだろう。だが、文を介したやり取りは、実際に夫婦として過ごした日々よりも、遙かに相手の内奥に迫るやり取りとなった。

真っ暗な空を見上げながら、ヒロは息をついた。

「お前様は、心の中にあるものを表に出さねば生きられぬ人だったのですね」

磯原を離れてからの英吉――雨情は、己の詩を世に問い続けた。一方のヒロは、一時は詩人として活動していたにも関わらず、英吉と別れた後は詩の一つも詠まなかった。

英吉はかねてより、「作者の名が忘れ去られても残るからこそ詩は凄い」と言っていた。だが、皮肉にも今、野口雨情の名は昭和二十年の今、実作を遙かに超えて轟いている。野口雨情の名が冠され続ける己の詩に、泉下の雨情は忸怩(じくじ)たるものを抱いているかもしれない。理想から遠ざかる己に苛まれながら、それでもなにかを書かずにいられないのが詩人という生き物なのだろう。

ヒロは、雨情の骨壺を撫でた。

「色んなことがありましたねえ。お前様はわたしとの暮らしを、真っ正面から詩の題材にはなさいませんでした。でも、今なら、お前様の気持ちが分かる気がします」

一人の人としての暮らしは、言葉にしてしまうには余りに鮮やかすぎた。新鮮なヒラメを手に入れたとき、煮付けにするのを躊躇うのにも似ている。ヒロが生涯においてほとんど詩作に手を染めなかったのは、人生で得た小さな欠片を心の隅に留め置いて、ただ一人、その輝きを眺めることが、途方もない贅沢だと気づいていたのだろう。

「わたしは今、一人です。でも―。わたしの心の中には、あまりに多くのもので満たされています。お前様との思い出も、それと同じくらい大事なものも、たくさん」

娘時代を過ごした喜連川、そして、人生で一番長く過ごした磯原の地。その天地に自分がいて、子供や孫がいて、その遙か遠くで夫と繋がっている。独りぼっちだった。だが、寂しくはない。

ヒロは目を閉じて波音を聞いた。

それはかつて、新婚の頃、詩想を熱っぽく語っていた英吉の傍で聞いた波音に、ぴたりと重なった。

目を見開くと、海の向こうに眉月が見えた。海からぼんやりと浮かび上がった月は、なぜか微かに滲んでいた。

雨情の骨を墓に納めた後、ヒロは家族にこうこぼしたという。

「私のすることは終わった」
「いつも独りぼっちだもの」
その言葉の意味を、ヒロは生涯語ることはなかった。